

大学生のビブリオエッセー

産経新聞 令和元年（2019年）9月25日（水）

大学生のビブリオエッセー

今日からは4日連続で帝塚山大学（奈良市）3回生の学生たちによる「私の一冊」を掲載します。

「エッセーを書いてみたい」「本を読みきりかけになれば」など、さまざまな声をいただきました。さっそく1日目です。

4日連続掲載します

大阪府東大阪市 岩永麻衣 (20)

【おくりものはナンニモナイ】

パトリック・マクドネル作

谷川俊太郎訳
(あすなる書房)

2019.9.25

「おくりものはナンニモナイ」。ってどういうこと？
タイトルを見た私は意味がわからなかった。でもなぜか、このシンプルな絵本に惹かれて、手にとった。

この絵本はムーチというネコのお話。ムーチは大好きな友達であるイヌのアールに何か贈り物をしようと考えた。ところがアールはなんでも持っている。さて何をあげれば喜んでもらえるだろう。思案の末にムーチは、そうだ、「ナンニモナイ」をあげようと思いつく。

最後にムーチは、その「ナンニモナイ」をプレゼントし、二人は「ナンニモナイ」を楽しんだ…。

読めば読むほど何を言っているのかわからなくなる。でもナンニモナイ、ナンニモナ

本当にほしいものは…

イと繰り返しているうちに、ムーチの思いつきを私なりに、実は何もなくて幸せなことなんだとようやく理解できるようになった。

最近はいろんなものが当たり前のようになりすぎるのに、もっと、もっと、と欲張ってしまっていた。何もあけなくても、友だちはただ隣にいただけで幸せなんだ。

この絵本を読んだとき、なにかうまくいかなくて自分が嫌いだ。でも読んだ後、今のままの自分で幸せなんだと知ることができた。

それからは今までよりプラスにものを考えられるようになり、少し自分が好きになった。とても短い物語ではあるが、自分の考え方を改めることができた。

ムーチ、ありがとう。